

の石地蔵立像が安置されている。 高八〇学、ブロック造り上塗りの木造瓦葺き屋根の祠があり、その中に舟形光背・合掌印 秋津三十日に香の道路に同して間口一三五シ、実行一一〇シ、軒下高さ一二〇ジ 屋根

台座は、高さ二五ジ 幅三一ジ 奥行三〇シ。

たとのことである。 かって此処の付近は子供の遊び場で、地蔵が小さいので子供達がよく押し倒して遊んでい 年代は不明、大正末頃と思われる。小振りな地蔵で新しいわりには磨耗している。

濱口善九郎・松本ウラ・高野保太・吉村二九次・赤星栄吉・岡田スエ」「吉本政彦・三藤恒記・三藤俊雄・北野繁三郎・緒方政次・小田亮三・山本直記光背には記名はないが,台座には次の十三名の名前が刻んである。

上の丁上組地蔵 (マップ番号 50 )

28

所在地 熊本市秋津二丁目一四番二四号

**契の銅板葺きの祠があり、その中に舟形光背・合掌印の石地蔵立像が安置されている。** 建立年月日は、安永七年(一七七八)甲戌(戊戌)二月吉日。 秋津二丁目十番二四号の道路に面して間ローニ〇ジ 奥行一一八ジ 棟までの高二一五

顔幅六学である。 舟形光背全高さ八六ジ 内蓮華座高一二ジ 地蔵の像高さ三八学 肩幅一五掌 顔高九学

台座には次の銘がある。
台座は、高さ三九挈 前幅三二挈 奥行三〇挈である。

(かたりべ学習会)

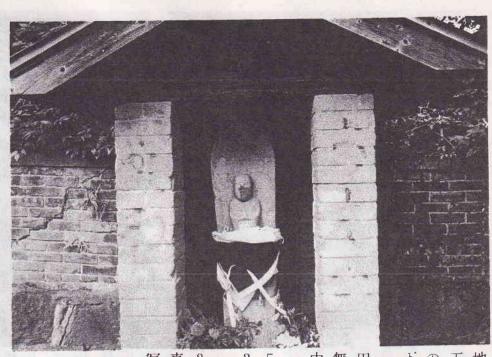


写真3 3 地蔵 5 無 田 0)

29

左面

中無田村

上中

若者中

正面

法界萬霊

安永七甲戌

二月吉日

右面

昭和五十一年十月改築

(墨書)

下の丁地蔵

(マップ番号 51

熊本市秋津二丁目一二番三二号

掌印の石地蔵が立っている。 建立年月日は、明和九年(一七七二)辰稔正月吉日。

肘張一三学

肩幅一三岁

屋根高さ五三学の屋根木造で塀にマッチした煉瓦作りの祠があり、

秋津二丁目十二番の道路角に面して間口九五学 奥行一〇〇学

顔高一〇学 顔幅七学である 蓮華座共で舟形光背全高さ八〇ジ 地蔵の仏高さ五八ジ

台座は、高さ四〇掌幅二五掌 台座と花台に次の銘がある。 奥行二五学。

台座に

明和九年辰稔

正月吉日

法界萬霊

(語りべ学習会)

- 4 2 -

神下高さ一二〇ぱ

その中に舟形光背・合



写 真 3 3

顔幅七学である。

新村地蔵

30 0

新村地蔵 (マップ番号 52)

世 話

> 進 安奇 奉

**人正拾年拾月吉日** 

土田肇 濱口浅吉

清田□雄

蕗野安雄 西虎熊 住岡 清

(語りべ学習会)

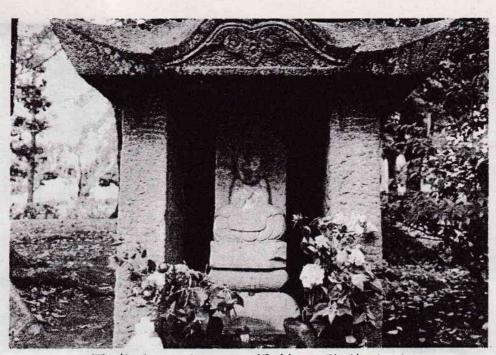
所在地 熊本市東野一丁目一九番三二号

舟形光背全高さ一〇一学 地蔵の身高さ三七学 肘張一一学 顔高八学 肩幅一〇学 クリート陸屋根の祠があり、その中に舟形光背の石地蔵が立っている。 建立年月日は、天明五年(一七八五)乙巳吉日。 東野一丁目一九番の道路に面して間ロー一八・五掌 奥行九二掌 高さ一三六学のコン

蓮華座幅三〇ジ 高さ一五ジ。台座幅三〇ジ 高さ一五ジ。 祠は、大正十二年(一九二三)に改修されており、七人の世話人が「大正十二年(一九

光背に仏語らしいものが彫ってあり、光背と花台に次の銘がある。 一三)七月吉日寄進」と記銘のある手水鉢を奉納している。

-43-



写 真 新 村 0 弘 法 3 3 3

31

新

村

0)

弘法

大

師

(マップ番号

65

所在地 熊本市秋津新町四 (水玉公園内

光背に 六道の 導ぬ□ ちまたにまよふ 人も皆 地 天明五年丁巳吉日 大正十二年七月吉日 蔵 青年團 本 体 改造 花台に 進 寄 泰 大正十二年 香立寄付者 世話方 七月吉日 本田信 下田順蔵 永田日傳 野田龍雄 久富辰蔵 郎

(かたりべ学習会)

祀ってある。 の祠に、その中に舟形光背・蓮華座で左手膝上に念珠を持ち、右手は胸に獨鈷持つ石像が し塚」にあつたものを、昭和九年(一九三四)四月「字水溜」(現在の秋津新町)に移設 して祀っていたが、戦後住宅化の進展に伴い、さらに水玉公園内に移設安置された。 間口八五ジ 奥行六八ジ 軒下一〇六ジ 屋根高さ五五ジ 新村の弘法さんと言われて、元「字境塚」(現在の東野四丁目二番町付近)の「やんぼ 屋根正面は唐破風の石作り

九学である。 台座は、一段台座二二学 二段一五学 三段九学 四段九学の高さで、台座に

座像高さ三三ジ 膝張二五ジ

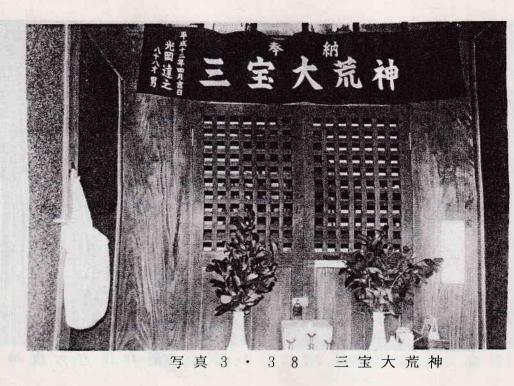
肩幅一二岁 顔高一一学

顔幅

地蔵は、全さ高一〇三掌

建立年月日は、弘化三年(一八四六)丙牛二月

九学である。



仏体は風化がひどく顔面が崩れかけている。多分昔は露像だったと思われ、堂は新しく 〔堂の左側壁の内側に

移転時に造ったものか。

ある。

又、祠の左壁に

「昭和九年四月二一日

村方全部当って移設す 七人

世話人」と彫んで

施主喜明院」と銘記がある。

弘化三丙千年 為一切衆生 二月吉辰

「台座に

新 村

弘化三年丙牛二月

為一切衆生

二月吉辰

施主 喜明院

世話人

田浦清八 村上清蔵

上田國太郎

田浦伊一郎 永田文記

村上壽一郎 吉村文雄 昭和九年四月二十 日

注

村方全部出テ

(西曆一九三四)

(語りべ学習会)

32 三宝大荒神

(マップ番号 62

熊本市沼山津四丁目五番二五号

三三四ジ 高さ三〇〇ジ(内基礎高二〇ジ)の木造瓦葺きの小堂があり、三宝大荒神が祀 ってある。 沼山津四丁目五番二五号の家屋東横まで道路から奥に入った所に、間口一九〇字 奥行

西浦の荒神さんより霊験あらかたと言われて崇拝されており、堂内も綺麗に掃除整備が行 き届いて周辺の人々の信仰の深さが窺われる。 御神体は神棚の中に安置されていて、外部から拝見することは出来ない。



れている。しかし手水鉢には銘がない。 れており、又「昭和二年(一九二七)一二月 堂内に「新築 昭和五十七年(一九八二)一月吉日 三五名の奉納者の名前」が墨書さ 勝山政吉奉納」と記銘された花立が奉納さ

(語りべ学習会)

33 上津代里石像物(マップ番号 61)

所在地 熊本市沼山津四丁目五番 (酒井氏方)

沼山津四丁目五番の酒井軍太郎氏方に堂宇と一基の石碑がある。

二行にわけて記されている。 縦一〇〇字 横六五字 高さ九二字の台座の上に、総高さ九三字 最大幅二八字の自然石 の表面を高さ四一ジ幅一九ジに彫り凹めて平面をつくり、「大歳之大神、護孫明神」と 碑の後ろには大きな椎の木がある。

(熊本市東部文化財調査報告書)

酒井氏方では、二一八学×二二〇学の堂をつくり、「農作業の神」として敬神されてい

る。

34 中津代墓地と板碑群 (マップ香)

63

(語りべ学習会

所在地 熊本市沼山津三丁目十番

納骨堂の建設に伴い墓地が整理された。 秋津の集落には、昭和の初期まで、古墓・新墓と称して二ケ所以上の墓地があったが、

最も古い現存墓地として中津代里がある。

る薬師堂がある。 御船~熊本線産交バス沼山津停留所のすぐ横に、 「通称 堂ん前の観音さん」と呼ばれ

そのすぐ北側に、光永家を中心にした墓地がある。

新田田田



18 ーク 三尊之□与令彫刻所栄讚 天文十一年壬十月日 幣奉建□釈迦如来 刀

浄照禅定門 E

卍

〇光永家墓地 熊本市沼山津三丁目一〇番

35

板碑群の後方一帯に、光永氏代々の墓が一群をなして建っている。 の頃より明治に至るまで沼山津・高森など諸手永の惣庄屋をつとめた家である。 光永氏は阿蘇氏の一族と称し、中世末下陣城主となり、近世には在地豪族として寛永

#### 板碟群

0

集中しているのは珍しく、西山地区の成道寺の三基以外にはその例をみない。 墓の中に四基の板碑が、西向きに建てられているが、戦国期の板碑がこんなに一ケ所に

自然石のままである。 板碑は、安山岩か砂岩様の自然石を板状に加工し、片面を粗く研磨したもので、 周囲は

立てある。 九年(一五四〇)碑をおき、後列左側(北)に永録十二年(一五六九)碑、右に無名碑が 現在の配列は天文十一年(一五四二)碑を最前列 (西)におき、その右後 (南) に天文

奉造立弥陀如来尊像一躬 妙国禅定尼

干時天文九年庚拾二月拾三日敬 頓證菩提也

キリーク

子

奉造立三摩耶尊像

基

永録十二年巳五月廿一日

り、正面中央に「南無阿弥陀仏釈□玄禅定門霊位

光永久七欽立」と記し、左右に「寛



退位光永久七欽立」で、 文六年(一六六六)二月廿四日」と刻んでいる。 それに続くものは寛文十一年(一六七一)五月一三日の「南無阿弥陀仏釈宗安禅定門不

次に貞享四年(一六八七)二月七日の「釈了心禅門

元禄四年(一六九一)正月二〇日の釈妙忍禅尼不退

正徳二年(一七一二)七月九日の「栄玄居士」など順に並んでいる。

以上の墓は下の台石は加工された方形石であるが、墓石はすべて自然石である。このあ とは享保四年(一七一九)となるが、それ以降は墓石も角石となり、 屋根を載せるもの

六、無蓋のもの一四を数える。

(熊本東部文化財調査報告書 昭和四六年一二月二九日調查)

葬された。 しかしこれら光永氏代々の墓も、県道拡幅工事に伴って現在地に纏めて納骨堂式に改 堂ん前の観音さんと並んでいる。

()歴 史 進 跡

小 楠 公 景 (マツプ番号 78

36

所在地 熊本市沼山津四丁目一一番

んもりと茂った公園 産交バス小楠公園前下車三分。 沼山津の東端、 益城町境に近く、県道木山線の南側のこ

ている。 この小楠公園には横井小楠の墓 (髪塚)と小楠先生頌徳之碑および小楠銅像が建てられ

ものである。 この地の小楠の墓は、 京都での遭難の後に、門人岩男俊貞氏が持ち帰つた遺髪を葬った

THE PERSON

「養石山の正之布の高い毒素にとなり、如本でなり着二豆素による、この地が

(語りべ学習会)

選ばれたとのことである。

古老の話では「飯田山の見える小高い場所にとの」かねての小楠の言葉により、この地が



られている。 設された。 たるので、 墓前には、「大正七年(一九一八)一月五日 され、地上六十契の高さに石垣を積み、その上に持ち上げられている。 墓はもと平地に、三尺角の橡取石を置いて建てられていたが、明治百年を記念して暈上げ 墓」と彫られ、裏面に「明治二年(一八六九)巳巳正月五日」と記されている。 墓碑は自然石で、正面に飯野村(益城町)の書家水野貞秀の筆で「小楠先生 墓の西隣には巨大な小楠の頌徳碑が建っている。これは大正七年が小楠没後五十年に当 その記念事業として頌徳碑建設の議が起こり、皇室からの御下賜金もあって建

本家彌富奉燈」と記した一対の燈籠が立て

現在地で除幕式が行われた。 天草の登立の飛岳の巨岩を鑿岩して碑文を刻み、大正九年(一九二〇)十一月十五日に

彌富秀次郎)が建設したもので、熊本市在住の彫刻家田島亀彦氏の手に成るものである。 この銅像は没後百年を記念して昭和四十五年(一九七〇)二月に横井小楠顕彰会(会長 頌徳碑の西に今一つ建っているのが横井小楠の銅像である。 篆額(てんがく)は細川護立侯の筆、 碑文は徳富蘇峰の撰で横井時敬の書である。

に展示されている。 なおこの銅像は、小楠の唯一枚の写真をもとに製作されたもので、原型は横井小楠記念館

荒木精之氏の撰文がある。

銅像の台座には日本談義主宰

昔は沼山津郷地区の学校(七・八ケ村)の小学校六年生の参加があった。 桜木・桜木東小学校の児童代表が参加している。 毎年二月十五日墓前祭が、地元の顕彰会の手によって盛大にとり行われている。 今でも地元秋津

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌、 秋津の歴史)

向いて関係者・協賛者への募金を呼びかけ活動する。 同年八月より募金活動開始。 横井小楠顕彰会により建設された銅像は、昭和四十二年(一九六七)一月建立計画立案 地元は勿論顕彰会の役員達は県内外・阪神・ 京浜方面まで出

熊本県五○万円・熊本市二○○万円・一般の寄付金三○九万四千四七三円・合計五五九万



2

昭和四十四年(一九六九)一一月一日銅像起工式。

四十五年(一九七〇)二月一五日除幕式。 銅像は、 横井小楠顕彰会より熊本市に寄贈された。

かたりべ学習会)

〇一回忌目の墓前祭に当たる昭和

37 四四 (マツプ番号 71

所在地 熊本市沼山津一丁目二五番九 号

熊本市指定有形文化財(昭和四十三年八月一三日指定)

時存の旧居である。 立直しのため在宅願を出して、相撲町からここ沼山津に移転した。 家を「四時軒」と名づけ、雅号を「沼山」と称した。若くして、藩校時習館の居寮長と 市バス野口健軍線、 小楠が家督を継いだが、城下町での生活は困難であつたので、 秋津小楠記念館行きで秋津終点下車五分。横井小楠こと横井平四郎 小楠がここに移ったのは、安政二年(一八五五)五月のことである。

津に塾を開き、実学派のよりどころとなった。 なつた。小楠は江戸留学を命ぜられたが、書物の上での学問に満足せず帰郷した後、

件を口実にして、武士の身分を取り上げられ、沼山津に蟄居させられた。 されるなど名声は高まる一方であったが、文久三年(一八六三)江戸に於ける士道忘却事 小楠は、安政五年(一八五八)から、越前福井藩に招かれ、幕府に建言書を差出し採用

小楠の沼山津在住は、前後合わせて約八年八ケ月であったが、四時軒での生活が、彼にと って最も充実した時期であった。 (六八)新政府の参与に召出されたが、翌二年一月五日京都で惜しくも暗殺された。 彼の評価は変わりなく、慶応三年(一八六七)大政奉還されるや、明治元年(一

茲には、坂本龍馬を始め幕末に活躍した多くの人々が訪れ、彼の教えを受けた。 一畳の座敷、四畳の板の間、 小楠顕彰の気運が高まり、 私塾は早く解体され、住居の一部も明治年間に焼失したため住居の一部、即ち玄関と十 縁側、厠だけで、 小楠記念館が昭和五十七年竣工した。 中 一階の物置が続いているのみであった。

なるの補充ななりいてのいろいろの要求養産は



へ火車ト写問手己なお・なお小橈先生についてのいろいろの参考資料は、記念館に展示されている。

(秋津小百周年記念誌・秋津の歴史)

## 四時 軒跡(マップ番号71)

38

## 熊本市指定史跡(昭和四三年八月一三日指定)地熊本市沼山津一丁目二五番九一号

八カ月居住した四時軒の所在地である。 横井小楠が安政二年(一八五五)から明治元年(一八六八)までの一三年間に実質八年

敷地のすぐ南に秋津川が流れ、一面にひろがる水田の先方には東南にかけて船野山のデアナイ・万田里の万石地である。

・飯

田山が眺められる。

えた命名であった。 小楠がこの旧居を四時軒と名づけたのも、春・夏・秋・冬四季折々の景色の絶佳をたた

このことは徳富盧花の『竹崎順子』の中でも言及している。

たりして日々を送っていたが、今日ではこの旧居に残るものとしては遺愛の「さざんか」 小楠は士道忘却事件でこの地に閑居していた間、弥富家を尋ねたり釣りや網打ちに講じ

が一株あるだけである。

(熊本市史 別編第二巻 民俗文

# 39 沼山津手永会所跡(マップ費 73

## 所在地 熊本市沼山津三丁目一〇番八七号の隣

御船〜熊本線の産交バス沼山津停留所より、西へ五十メートルの処に五段石垣が残って

いる。この一帯が会所跡である。

本の榎、「門前・裏門・仕事場」などの地名が残っている。 遺跡としては、石垣の根石がそこそこにあり、古井戸や二百年以上を経たと思われる一

熊本藩では地方(じかた)行政の区画として郡と村の中間に手永(てなが)が設定され



限りの交替となっている。

ている。手永とは「手の届く範囲」という意味であろうが、文字通り地方行政の基本区画 として機能している。

手永の長を「惣庄屋」といい、手永の役所を会所と称した。

ようになつた。 会所は初めは惣庄屋の自宅をあて、役宅又は御用宅と言った。後に会所と役宅は別にする

たが、その時、近郷の支配頭をしていた「光永雅楽」が沼山津惣庄屋に任命された。藩主細川忠利が肥後の領主として寛永九年(一六三:)に入国後、藩内に手永制をしい

(寛永十年五月・一六三三)

これが沼山津手永の始まりで、光永氏は地名をとって沼山津四兵衛と称した。

即ち初代の「沼山津四兵衛維重」である。

氏が世襲(九代)し、以後明治三年(一八七〇)廃止されるまでは免役・所替による一代 られた惣庄屋は六十一名であり、沼山津手永の沼山津四兵衛惟重も三十石を給された。 当初一〇〇人を超えていた惣庄屋も島原の乱後の寛永十五年(一六三八)に地行を与え 沼山津手永の惣庄屋は、寛永十年(一六三三)から寛政一〇年(一七九八)までは光永

と言えよう。 おり、会所のすぐ南には船場があり、沼山津会所は、地形的にもよき条件を具備していた が所属で、しかも水運の便がよく、肥後藩の御蔵のあった川尻とは、加勢川でつながって 沼山津手永は、東は木山郷(十五ケ村)から、西は託摩原の一帯で農産物の豊富な地帯

庄屋の小堀宇右衛門が手永中央の木山迫村東福寺へ移転させる。 会所は、九代の惣庄屋沼山津四兵衛惟明が寛政十年(一七九八)高森へ転任後、 十代惣

村二会所ヲ引直ス」とある。 「光永四兵衛先祖ヨリ自分屋敷ヲ会所トスルガ、沼山津村ハ手永端に付キ、手永中央ノ迫 (益城町史より

寛政十一年(一七九九)に木山町村に会所の新築作事開始。翌年作事完成。

四十五年間木山にあったが天保十四年(一八四三)光永熊助惣庄屋(一七代) の時に再び

明治三年(一八七〇)改革により沼山津会所は廃止される。

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史・益城町史)

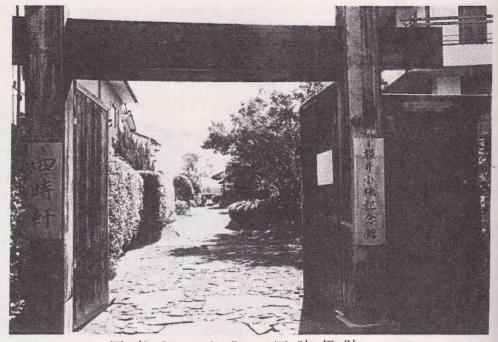


写真3·45 四時軒跡

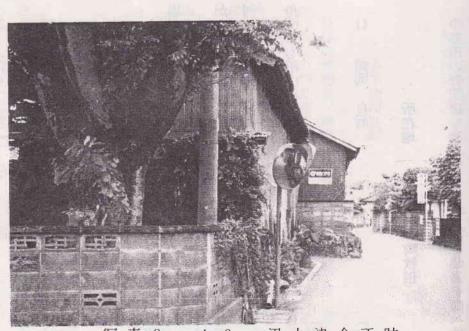


写真3・46 沼山津会所跡

### 0 光永氏

中世の時代、郷土の豪族であった。

り、その孫が光永雅楽である。 光永一族は、阿蘇氏からの出で、益城郡下陳城主光永中務の弟に、光永刑部という者がお

寛永一〇年、沼山津の初代惣庄屋に任命されたが、以後寛永の頃から明治に至るまで木

山・高森などの惣庄屋を務めた。

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

40 沼山津舟場跡(マップ書 76

所在地 熊本市秋津町沼山津

場があった。 会所跡より南へ約百五十㍍の川辺(旧木山川・現秋津川の上沼山津橋の右岸)に舟着き

があって、昔の名残りを残し、集落の人々の洗濯場であった。 たびたびの洪水・河川改修にて、今は埋没してしまったが、昭和二十三年頃までは石段

すぐ近くには土蔵もあった。

舟問屋も沼山津には二軒あって隆盛をきわめたらしい。 江戸時代は舟による米・木材・日用雑貨・肥料などの運搬で重要な役割りを果していた

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

41 間島

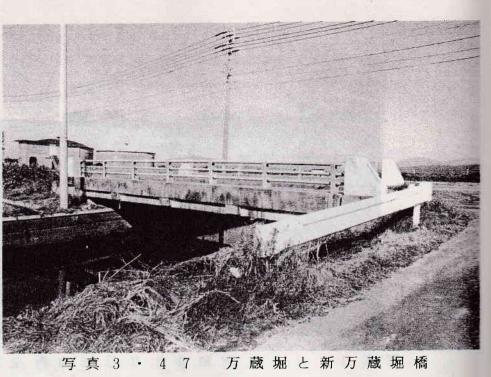
(マップ番号 93

所在地 熊本市秋津町秋田

ばれ、ここから川尻に送られた。 間島は、藩政当時舟運の中心であった。山西・戸島方面の物資が、戸島往還によって運 中無田の野間橋を渡って、六嘉~御船県道を南へ約二百称、間島橋付近のことである。

又、赤井川(現木山川)は、間島から東無田・新川を上って赤井に達する舟航があって

一旦と言語に来るにもら



注記

写真の万蔵堀は、圃場整備事業(一九七八~一九九 四)で旧万蔵井手の北側に掘られた幹線排水路 県道小池竜田線との交差に架かかる橋

> 木山を経て船着き場に集められ、 木崎部落にも現在船着き場の跡がある。ここは馬場楠・道明・戸島方面からの物資 舟便で間島に来るのである。

年貢の上納の時期ともなれば、舟の上り下りも相当に頻繁であった。

明治の始めまでは、 白い帆かけ舟が、 間島から赤井川を上る姿がよく見かけられたとのこ

秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

から南にのびた台地で、やがて秋津川に落ちている。 秋津の地勢は、西北から北にかけて託麻が原に連なり, 阿蘇外輪山の裾がなだらかに北

被われ、それが凹路の道に集まり、濁流となって、恐ろしい野水(のみず)となって一気

この台地の畑地は火山灰地で、水もちが悪く、一度大雨が降れば、畑の表面は一面水に

に秋津川に流れ、水かさを増して洪水となる。

あり、 梅雨末期の大雨は、どこかの集落の橋(土橋)が流失するか、 その水害は年度行事であった。 秋津川の堤防決壊などが

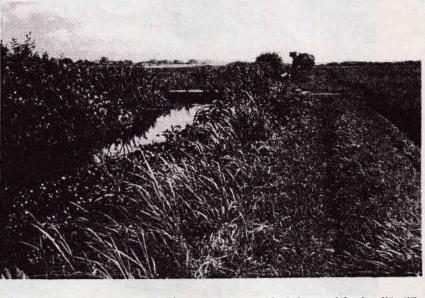
水が引くことなく、流失物の処理は集落総出の公役作業であつた。 低地の水田に、 一旦流れ込んだ泥水は、一面の海で一週間位或いは十日間もの永い間

これら幼い頃の思い出をたどれば、昔の人々の水との戦いは想像に余りあるものがある。

ある。 を築き、無田新地の造成で、 ひどくなった。そのため水害に耐えきれず、集落こぞって他に住居を求めて移転した所も もともと低地で水はけが悪いところに、加藤清正が、 (現在の東野一丁目) 託麻田園の穀倉地帯を作ったことにより、 画図から川尻方面にかけて大堤防 水害常襲地が一層

った。 の収穫も、水害のため皆無の年も多く、三年に一度とれればよいという諦めの気持ちとな このような状態で、地域住民の生活は、将に心身共に苦悩の中に営まれていたが、折角

けた。 しかし先祖はどうにかして、この苦難から免れようと数百年の間、水利事業に努力を続



月 新 衛 堀 3 昭 和 5 8 頃 0) 左

### 42 〇万蔵堀(万蔵井手)跡

(マップ番号 94

上流広安(現益城町)から西へ、中無田境に達している。 万蔵堀は、木山川と秋津川との間にあって、沼山津橋より南へ凡そ一〇〇〇なの地点を

って掘削されたもので万蔵井手とも呼ばれている。 文化年間(一八〇四~一八一七)、荒木万蔵(当時は上益域郡会所役人では)の手によ

## 〇新左衛門堀(しんじゃ堀)跡 (マップ番号 91

43

四百二十二間・幅五間・深さ五尺。(長さ約七六〇称 幅九な 寛政の初期、中無田の庄屋 その恩恵を蒙る田地二十町歩。墓は中無田の間島橋近くの県道沿いに今も残っている。 万蔵井手の北側に並行して、間島横道の処に達している「しんじゃ堀」がある。 八重桜新左衛門の事業によるものでその名があり、堀は長さ 深さ一・五位

#### 44 〇裏井手跡

(マップ番号 95)

5 6

に流したのは嘉永年間(一八四八~一八五三)の惣庄屋河瀬安兵衛の嗣子 万蔵井手・新左衛門堀(しんじゃ堀)の井手を裏井手に導いて、下流西無田懸かりの方 典次の力によ

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

広いのではと思われる位の状況である。 これら東西幹線に対して無数の南北支線が掘られており、耕地面積より排水路の面積が

土地基盤整備事業等が進められ、 かっての万蔵堀(万蔵井手)・新左衛門堀(しんじゃ堀)・裏井手は付図二・三の これらの改修で以前よりはよくなり、更に昭和になり、河川改修・排水ポンプの設置や 耕地の姿は一変したが、現在も水害の心配は免れない。

土地基盤整備事業等が進められ、 かっての万蔵堀(万蔵井手)・新左衛門堀(しんじゃ堀)・裏井手は付図二・三の 耕地の姿は一変したが、現在もが害の心配は見れない

昭和六〇年代初めの秋津町水田部地図と秋津水田旧水路遺跡図を参照

(語りべ学習会)



年 頃の 裹井手 昭 和 5 8 月 真 3 9 写

の旧道の側にあった。 現在の県道が出来て新しく野間橋が架けられた昭和四十一年 しんじゃ堀を掘削した新左衛門の墓は、旧木山川(現秋津川)の野間橋のすぐ、たもと 〇新左衛門の墓 熊本市秋津町秋田 (県道六嘉秋津新町線沿い) (一九六六)三月頃に現在

45

新左衛門の墓と記念碑(マップ 98

			墓碑に
北面	南面	東面	正面
施主	取頭八	寛政十	釋
新左衛門 世 伊 右衛門	八重桜新左衛門	寛政十戊午八月十日死	西
解 門	門	死日	遊
	東面下の	つ 台 石 に	

見□山 小七

いう世話人がい

□林□助 □□右衛門

小石川力右衛門 □嶋常右衛門 □林吉兵衛 「頭取とは、当時 相撲世話方の頭 に助役・差添と のことでその下 各地にあった宮

後年頭取もして は地方の力士で いたのであろう 八重桜新左衛門 (吉田司家に

錦戸 宇助

□嵐佑□□□

太右衛門

文化元

よる)」

碑のある所に移転された。碑が出来て約九年後のことである。

れたものであろう。

新左衛門の墓碑には、次のように記されている。

昭和三十三年は(一九五八) 寛政十年は(一七九八)



碑 記 念 衛 新 左 地に建てられた。 正面の「新左衛門堀之碑」は当時の熊本市長坂口主税氏の書、 の基礎上に建てられている。 末雄氏の碑文で次のように記されている。

新左衛門堀の碑は、

昭和三十二年(一九五八)五月にしんじゃ堀りのしもにあたる現在

○新左衛門堀の碑

幅九〇学 厚さ二五学 高さ一一〇学の自然石の碑が、二八〇×二八〇学 高さ一八学

裏面は当時の秋津村長富島

なお息子の彌右衛門の墓は、出口の三藤氏の墓地内にある。

×五一学 高さ二二学の傘石、

墓は、

四八×四八シ。高さ二一シの台座に、三〇×三〇シ

一五×一五学。高さ二六学の宝珠から出来ている。

高さ六五・五の墓石、

五

(彌右衛門夫人は三藤家の出

新 左 衛 門 堀 之 碑 世話人 区長小田

正面

裏面

間幅五間深さ五尺其の恩恵を蒙る田地二十町 通し用排水両用に便じた堀は長さ四百二十二 て浚渫を行い翁の偉業を偲び感激新なものが 寛政の初期圧屋新左衛門翁此の地に新な堀を 歩村民歓喜して翁の功績を讃えた 本春初め

昭和三十三年五月 しく翁の餘徳を仰ぐのである 中無田区民一同

かくて新左衛門堀の名は永く伝わり村民ひと

住岡 清 富永彦次郎 浜口茂春 高野 昇 吉本芳彦 浜口久雄 森下芳太郎 三藤俊雄

田島久之 園田政秋

(語りべ学習会)



#### 年撤去 前 秋 田

#### 46

## 〇秋田堰跡

لح

堰

想

野間橋から下流へ百米ぐらい下った位置に、 88 熊本市水道局の水道管が南の岸より北の岸

に向かって秋津川を横断しています。

年代に作られたものと思われます。 が、石柱・石畳等石材だけを使用した作りで、セメントは使われていません。かなり古い この付近が元「秋田堰」のあった所です。 いつ頃の年代に建設されたものかわかりません

今は基盤整備事業成って堰も取り壊されて、昔日の面影はなく、人々の脳裏から忘れ去

らんとしていますが、永い歳月にわたってこの堰の水が、中無田・西無田・沼山津の

一部

の水田を潤してきました。

永々と続けられてきたこの行事も時の流れと共に旧から新へと移り変わり今は木山川から 承され、先人達は何を思い堰をかけてきたであろうか。 田植えの時期がくれば一度も休むことなく「堰かけ」が行われ、 秋津川へと名をかえた。この川のしずかな流れを見るだけです。 先達から次の時代へと継

秋田堰は「板堰」でありました。昭和二十年前後までの木山川は川幅が十六称ぐらいで

堰所の所はくびれて狭くなっていて、十称ぐらいであったようです。堰所は右岸・左岸と あったと思います。

した。 も高さ三・五粒、横幅五粒ぐらいの石垣で護岸されていて、川底は石畳が敷かれていま

石垣の中程に「堰板」を架ける石柱が両岸に立てられていました。

根本(九十契)・末口(六十契)長さ十三なぐらいの丸太の一本物が北岸の上から南岸の 石柱の上に架けられていました。この丸太を通称「オモノキ(重い木の意味)」と言いま

この「オモノキ」は堰所では重要な役目をする木です。次のような方法で「堰かけ」

の切り込みに、下を石畳の切り込みに組み込みますと五つの堰の間ができるわけです。 先ず四本の中柱を岸の石柱より一間の幅をあけて立てて行きます。柱のホゾをオモノキ 昭和54年圃場整備事業前・下流から見る)



写 真

3

のでした。 このオモノキは常時かけられていて子供の頃は「一本橋」と言って親しみ、よく渡ったも 最後になりますが、堰かけは西無田 富永彦次郎・内田莠両区長の斡旋が大であった。 大雨増水するような時は堰板が遠くへ流れて紛失しないように早めに堰を開けていました。

秋田堰は昔から板堰であった。

鉄扉に改造、これによって漏水を防ぎ且つ水の調節をとる事が出来るようになった。 の取入れ前まで其のままである。 両区長の斡旋で、土地改良区と村からの補助併せて約十五万円で、二間だけを上下開閉の 木山川改修の際支柱八間の頑丈なコンクリート製になったが、田植前に取付けた板は、 それで大水の時、水の調節をはかることの出来るようにと昭和二十七年中無田・西無田 秋

(秋津村略史による)

昭和六十一年に秋田堰は撤去された。

(マップ番号

47 ○しんじゃ堀の堰跡

田田田田田田田 時の正皇兼王衛門からの妻本職を第一た際代に作っまたものと伝え

90

(圃場整備事業完成記念「豊穣」浜口力蔵さんの堰回想による)

(現在の若葉校区)と一年交替で行われていました。

げると同時に立柱がはずれ一時的ではありますが、物凄い濁流が渦を巻いて流れる中へ、

堰を落とす前に若い人がふんどし一つで下流の岸へ待機していまして、オモノキをこねあ

堰板を追って流れに飛び込み、遠くへ流れぬうちに拾い上げて岸辺につけていました。

大雨で川が増水してオモノキが動いて自然に堰が外れた事も何度かあったようでした。

不思議と怪我などなかったものです。

(途中略

ど詰めていました。以上で堰かけは終わりです。

十三粒のオモノキと四本の中柱、両岸の石柱と堰板戸で堰が形成されていました。

次に「堰おとし」となりますが、この堰はオモノキを少しこねると簡単に落ます。

柱と堰板に隙間があればクサビを打って、板と板との隙間には水漏れを防ぐためにワラな

堰板を一枚、二枚と二・五称ぐらいの高さまで積み上げていたようでした。

昭和54年圃場整備事業前・下流から見る)



写 3 3

0 か

られています。 この堰は寛政年間、 一時の庄屋新左衛門がこの排水路を堀つた時代に作られたものと伝え

いような頑丈な作りでした。 高さ一・二粒、一間幅の堰が二つありました。石組の作りで天変地異にもびくともしな

樋

せん。田圃に用水路がついていません。 この堰の水は「床水」と言って、用水路の水口からどんどん水を入れる方法ではありま

るものです。 堰の水が増えていくに従って海の潮が満ちてくるように、 水田にじわじわと水がのってく

水のレベルは一定であり、水田は高低が一枚一枚違いますので、どうしても水引きに無理

となり、低い水田の人は背に腹は変えられず堰板を二枚ほど外します。 田植え後、高い水田に十分水を引きますと低い水田は冠水状態で葉先が見えるだけの深水 が生じます。

翌日高い水田の人がまた堰板をかけます。

苗が伸びるまでの一ケ月間ぐらいは開けたり、閉めたりの繰り返しで水の調節が保たれて いたようです。

この堰の水は堀の南側の水田を主に涵養していたようでした。

命を閉じました。 よって堰としての使命が終わり、寛政年代から続いて堰所も世の移り変わりと共にその寿 地域の人たちに永い歳月にわたり、親しみ、馴染まれてきたしんじゃ堀の堰も基盤整備に

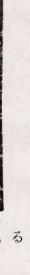
|圃場整備事業完成記念「豊穣」浜口力蔵さんの堰回想による)

48 〇計路堰 (マップ番号 92

この堰はしんじゃ堀の堰より川幅が広いだけ大きかったようです。 裏井手にあった計路堰はその名のごとく、計路方面の水田を養っていました。

の調節を行っていたようです。 戦後何回が架けられていたのを見ましたが,いつの頃からか計路の樋門の開閉によって水

(圃場整備事業完成記念 「豊穣」浜口力蔵さんの堰回想による)



幅でありました。

**鶯川にも小さな堰が二個所ありました。** 

天神木の中島さんの水田あたりに五尺ぐらいの



3 田 を 5

この堰の水は流域の水田を養い、またこの地域は数少ない貴重な田苗の苗床であり、

に有意義な堰であったと思います。 特

水は真っ直ぐに貝原地区の用水路に流れていました。 下流の堰は小学校の南西あたりで川が西に曲がっていて、 曲がる所に堰が設けられ、 川の

ーリングが突かれましたが、上流は今、跡形もありません。 付近の住宅化と河川改修に伴い、堰も取り壊され、その後上流に二個所下流に 一個所ボ

区は埋め立てられ畑地となり、公園も建設されて水を必要とする水田は付近には見られま **貝原地区の吉本宏徳さんの田の横のものはそのままいきていると思いますが、現在貝原地** 

(圃場整備事業完成記念「豊穣」浜口力蔵さんの堰回想による)

50 〇沼山津堰

毎年築直しには多大の労力と少からぬ資材を要した。 沼山津堰は、益城町福富懸かりにあったということで、石積みの極めて大ざっぱなもの

それで従来もこの改造が行われたが完全には出来なかった。

円で昭和二十八年(一九五三)五月着工した。 が出来、第一区長村上半次、第二区長沼津秀雄の両氏大いに斡旋に努め、総工費五十九万 昭和二十五年の災害復旧事業として地方事務所に申請し、豊田農地課長監督の下に設計

(昭和二十八年の秋津村収支決算が一千五百万円規模の時代)

時しも大雨続き六・二六の水害にあって工事は遅延したが、同年十一月竣工した。 力によったものである。 経費は六割五分国庫補助と一割五分の村支出で、資材の収集運搬構築の助手は総て集落の

(秋津村略史による)

で夜も眠らず水引をする苦労は一通りではなかった。 沼山津懸りの田は、沼山津堰から取入れる用水のみであつたので、旱魃の年は用水不足

設けられた個所から湧水するのを、サイホン式によって木山川を越え橋口に導き、あの一 しかるに上田龍三郎(かみた)りょさぶろう)氏の石油開発事業の一として、中津代里に

帯約三十町歩にわたる灌漑に成功した。

ことにしたら同氏はその田地を無償で提供された。 又、此の効果を認めて集落協議の結果、別に字東無田地内弥富熊太氏の田地に鑿井する

昭和十六年(一九四一)のことである。

安彦、同吉永清三氏、その他関係役員の並々ならぬ努力によって完成した。 時は世界対戦の真只中でこの事業には多大の苦心をしたが、志内村長の熱意と、区長福田

たたえてある。(上沼山津橋上流の突井戸水神の項参照) 灌漑実に二十町歩に及んでをる。現地に建立された石碑に芳名を録して永久にその功を

ようになった。 この二つの用水によって、沼山津は従来畑苗のみであったが、田苗を作ることが出来る

ろう。 旋、並びに作業に従事した人々の熱意は、このサイホンの有る限り長く忘れられないであ この工事に対しては村上・沼津両区長の労苦、常にこれを推進した集落選出議員諸氏の斡 九五二)五月、村費を以てヒユーム管によるサイホン式に取替えた。総工費二十五万円。 然るにサイホンによる用水は用材が腐食して漏水が甚だしかったので昭和二十七年(一

(秋津村略史による)

52 鸄 城 跡

(マップ番号

83

熊本市東秋津三丁目一番

(現在 中無田吉住氏宅

永録八年(一五六五)阿蘇大宮司家 益城郡御船城主甲斐民部大輔親直(宗運)



天正十五年(一五八六)二月 豊臣秀吉九州征伐とし大軍を短郡竹宮に鷺城築きその与力 甲斐飛驒守正運を以て居城せしむ。

年五月御国へ大勢入来り所々の城を攻め落とす。 天正十五年(一五八六)二月 豊臣秀吉九州征伐とし大軍を師ひて薩州を攻め平ぐ、同

此時甲斐正運降参して城終に陥る。

--- と上益城郡誌に記されている。

ス 健軍陣内城に「永録年中 其後甲斐宗運カー族甲斐正運ヲ城代とす」とある。 国乱丿節 (戦国時代)城主光永摂津守人道浄英克スシテ落城 (光永氏家記・古城考

辺の地形や鷺観音堂からしか往時をしのぶことはできない。 御船城の出城であった鶯城も、現在では、城跡の窪地・「うっぼげ」と言われる鷺川周

(かたりべ学習会)

53 秋津村役場跡

秋津支所跡(マップ奪 72)

所在地 熊本市沼山津二丁目一五一七一 (下津代里)

〇秋津村役場跡

村』が成立。村名は、秋田の なぞらえて命名されたという。 明治二十二年(一八八九)市制町村制が実施され、 「秋」と沼山津の「津」をとり、日本の古名「あきつ島」に (秋津村略史) 沼山津村と秋田村が合併して『秋津

行政の中心であった。 村役場は沼山津下津代里におかれ、昭和二十九年(一九五四)熊本市に合併するまで村

設けられ、職員も増員に増員を重ねて熊本市編入直前は総員十七名に達していた。 戦後の諸制度の改革によって役場も従来の各係の外に「厚生・衛生・統計・保険」 予算規模も、二十八年度の収支決算は一千五百万と昭和二十三年の当初予算二十七万七 等が

千円に比べると隔世の感があると言われる程の巨額にになっていた。

初代村長から鮮本市編入までの歴代村長は次の通り。

- 6 4 -

千円に比べると隔世の感があると言われる程の巨額にになっていた。 設けられ、職員も増員に増員を重ねて熊本市編入直前は総員十七名に達していた。 予算規模も、二十八年度の収支決算は一千五百万と昭和二十三年の当初予算二十七万七

初代村長から熊本市編入までの歴代村長は次の通り。

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
富島	辛川	志内	野田	吉本	内田	榊田	上田華	弥富	野田	内山土	志内容	野田	氏
末雄	実男	貞広	幸平	聖一	亀雄	_	上田龍三郎	為雄	真吾	内山志津馬	志内孫太郎	真吾	名
_					昭和			大正	=			明治	就
十二年	十九年一	十二年	八年	四年	三年十二月	十三年十二月	十三年	九年	三十四年	二十九年	二十六年	明治二十二年	任
四月	0月	六月	六月	五月	上月	上月	六月	五月	六月	五月	五月	五月	L
_					TX	昭和			大正	_	_	明治	退
一十九年	一十一年十二	十九年	十二年	八年	四年	三年上	十三年十二月	十三年	九年	二十四年	一十九年	一十六年	压
九月	工月	七月	六月	五月	五月	三年十二月	工一月	五月	五月	五月	五月	五月	任

### 〇秋津支所跡

合併が強力に推進された。 昭和二十八年(一九五三)九月一日合併促進法が公布され,地方自治の強化をめざして

村」と三村の合併を示された。 秋津村と熊本市は、親密な関係にあったが、県の町村合併計画試案では、 「飯野・広安

が決定。 編入合併」が圧倒的であり、昭和二十九年(一九五四)二月十八日熊本市と合併すること 本市との合併かで検討されたが、各集落・村民の意向は地理的にもっとも近い熊本市への 即ち、秋津村は、益城中学校組合を作っている「飯野・広安」との三村合併か、又は熊

野間原(のまばる)は、原文のまま記載している。

熊本市秋津町」となり、役場庁舎に「熊本市役所秋津支所」が設けられ、秋津市民の利便 が図られた。 熊本市側の手続きが踏まれて、昭和二十九年十月一日秋津村は熊本市へ合併編入され、

設され、支所のその役割は終わった。 昭和六十年(一九八五)八月一日熊本市秋津三丁目一五番一号に秋津市民センターが開

その跡地は、二町内公民館として活用されている。

(語りべ学習会)

(マップ番号

86

54 秋田村元標跡

熊本市秋津一丁目二番二〇号の前(野間原二〇四六番地)

秋田村は明治十年(一八七七)から二十二年(一八八九)までの村名。

明治九年(一八七六)三月上益城郡の中無田村・西無田村・下無田村と託麻郡健軍村のう ち野間が合併して成立。

津一丁目二番二〇号)に設置されていた。 秋田村の元標は、本村字野間原(のまばる)二〇四六番地宅地の前、 (現在の熊本市秋 6 6

村へ二十五丁三十一間三尺(約二・七キロ)。井寺村へ二十二丁十七間(約二・四キロ)。 標へ二十一丁十間(約二・三㌔)。沼山津村元標へ十八丁五十八間(約二・○㌔)。六嘉 元標へは、熊本県庁ヨリ南東二里十丁五十六間三尺(約九・八㌔)四隣託麻郡健軍村元 :と郡村誌には記されている。

(語りべ学習会)

55 沼山津村元標跡

(マップ番号 74

熊本市沼山津三丁目一三番七号(中津代里・千七百七十一番堂床前)

沼山津村は明治八年(一八七五)から二十二年(一八八九)までの村名。

「おいは 「しゃしに」これに「松本語の東京画像は、西田画像はちら春」「東京

第二下上首二 · 目一三者十县 / 口海 / 里一十百十一 · 者写 / 百市

本市沼山津三丁目一三番七号)に設置されていた。 明治八年(一八七五)乙亥に上益城郡の東沼山津村・西沼山津村が合併して成立 沼山津村元標は、本村字中津代里千七百七十一番堂床前・西小路地蔵の角地(現在の熊

元標へは、熊本県庁ヨリ東二里二十三丁三十六間三尺(約一一・二キロ)。

〇キロ)。健軍村へ三十三丁五十間(約三・六キロ)。島田村へ二十丁八間三尺(約二・二キロ 四隣廣崎村元標へ十五丁三十五間(約一・七キ゚)。秋田村元標へ十八丁五十八間 ----と郡村誌には記されている。

(語りべ学習会)

56 沼山津校跡

(マップ番号 75 )

熊本市沼山津三丁目一一番四三

明治五年(一八七二)に学制が布かれて,「村に不学の戸なく、家に不学の人がないよう に」と、全国津々浦々に小学校が建てられた。 慶応年間沼山津村では、坂本貫が寺小屋を開いていた。 明治七年(一八七四)から明治二十二年(一八八九)三月までの人民共立小学校。 (男五十五名)

明治二十二年(一八八九)市町村制が布かれて、秋田・沼山津の二つが合併して秋津村と なるに及んで現在の地に秋津尋常小学校(修業年限四ケ年・二学級)が設立された。 一番四三号上田氏宅)に設けられて、始めて学校教育が施されるようになった。 沼山津小学校は、明治七年(一八七四)四月現在の上田隆氏邸内(熊本市沼山津三丁目 郡村誌には「村の西、字下津代里ニアリ。生徒数男三十人・女九人」と記されている。

(語りべ学習会)

秋田校跡

(マップ番号 85

所在地 熊本市秋津一丁目二番付近

(野間原)

慶応年間秋田村では、吉住桂蔵が寺小屋を開いていた。(男二十五名)明治七年(一八七四)から明治二十二年(一八八九)三月までの人民共立小学校。

うに」と、全国津々浦々に小学校が建てられた。 明治五年(一八七二)に学制が布かれて、「村に不学の戸なく、家に不学の人がないよ

られて、始めて学校教育が施されようになった。 秋田小学校は、明治七年(一八七四)四月字野間原(熊本秋津一丁目二番付近)に設け

いる。 郡村誌には「村の中央。字野間原ニアリ。生徒数男四十一人・女三十三人」と記されて

不振の状態であった。 秋田校は新築されたが、数年を経ずして火災にかかり、民屋を借入れして教場として頗る

なるに及んで現在の地に秋津尋常小学校(修業年限四ケ年・二学級)が設立された。 明治二十二年(一八八九)市町村制が布かれて、秋田・沼山津の二つが合併して秋津村と

(語りべ学習会)

# 58 上田龍三郎先生の碑(マップ奪 77)

# 所在地 熊本市沼山津三丁目四番三三号 (一町内公民館敷地内)

も眠らず水引きをする苦労は一通りではなかった。 沼山津懸かりは沼山津堰から取入れる用水のみであったので、旱魃の年は用水不足で夜

に成功した。 ホン式によって木山川(現秋津川)を越え橋口に導き、あの一帯約三十町歩にわたる灌漑 里に設けられた個所から湧水するのを(現県道小池龍田線脇・所謂堂ん前の流れ)、サイ しかるに上田龍三郎氏(通称かみだ)りょうさん)の石油開発事業の一として、中津代

が稼働するまで潤してきた。 昭和初年代の頃である。このサイホンは昭和六十年(一九八五)圃場整備事業でポンプ

三年(一九二四)頃、一時村長もしておられた。 上田龍三郎・通称かみだりょうさんは、沼山津の中でも、指折りの資産家で、大正十

かなりの山気もあったようで、石油掘削には失敗したが、怪我の巧妙というか

大量に隣出した水は、現臭道の地電田線線の、水路を清流とし、平置堂の頭の流れとなっ



碑

て、周辺の人達の洗い物等の生活用水と灌漑用水となったのである。 大量に噴出した水は、現県道小池龍田線脇の、水路を清流とし、所謂堂ん前の流れとなっ

が終わったが、沼山津には計り知れない恩恵をもたらしてきた。 現在は県道が拡張され、水路は蓋で覆われ、又水位が下がり水も出なくなり、その役割

その恩恵に感謝して地元では、一町内公民館敷地内に、 の功績を顕彰している。 「水神」として記念碑を建て、そ

記されている。 六一×一六一掌の台座の上に、全高さ三なの自然石に「水神・上田龍三郎先生之碑」と

中台 一つ丘×一一つシ 高さロルン O目式コー台座 基礎 一六一×一六一シ 高さ七二シ の間知石組

上台 七八× 四八掌 高さ 八掌 のコンクリート中台 一〇五×一一〇掌 高さ四九掌 の自然石

上幅 一七四学 中幅八〇学 下幅五七学 厚さ三二学 高さ一七四学

59 耕地整理記念碑(マップ番号 87

所在地 熊本市秋津町秋田 ( 秋津川·中無田橋際

木山川 碑は昭和四十二年(一九六七)建設。 昭和四年(一九) (現秋津川)を越えてトロッコで運び、嵩上げ耕地整理をした記念碑である。 九 「字塘下」が堀が多く低湿田だったので、「字貝原」の畑の土を

碑 幅四一 厚さ三五 高さ一六五 割石の自然石台座 幅八一彩 奥行六三彩 高さ四〇学

-69-

(語りべ学習会)



写真3 · 5 7

耕地整理記念碑

								_							
-34								H		THE PERSON	Į.			裏面	正面
同	同	同	同	同	同	同	同	同	委員	会計	同	副組合長	組合長	昭和四年耕地	耕
清田俊三郎	三藤 仁平	三藤 清三	富岡芳太郎	志内孫太郎	緒方 政次	北野繁三郎	吉本政次郎	吉本喜世記	住岡 米吉	三藤熊太郎	田島久次郎	志内 次郎	吉本聖二	四年耕地整理施工	地整理
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	委員	委員長	建設委員	昭和四十二年建設	記念
浜口	清田	小田	田田	三藤	山本	高宮	三藤	森下艺	吉本	三藤	吉本	浜口		<b>建</b> 設	碑
忠寛	清春	能弘	藤徳	哲夫	定雄	政吉	行夫	森下芳太郎	利治	俊雄	芳彦	久雄			

(語りべ学習会)



土地改良区内に記念碑が建立さている。 昭和から平成にかけて十五年に亘る圃場整備の大事業を記念して、平成六年(一九九四)

業 念 事 記 豊 記念碑 碑文として次が刻まれている。 工事の経過 碑 平成 昭和五十三年(一九七八)三月七日 昭和五十五年(一九八〇) 昭和五十四年(一九七九) 六年 (一九九四) 幅五七三×奥行二七三×高さ一三五撃 幅二四〇(広い所)×厚さ六〇×高さ二四七学自然石 幅二八〇×奥行二〇〇×高さ 上段磨石組 四五学 事業集結・記念碑除幕 測量開始 県営事業として公告 工事着手 自然石組 間知石組

## 事業の沿革

圃

本地域は熊本市東南部に位置し、緑川水系加勢川の支流・木山川と秋津川に挟まれ

も多数のクリークが存在する低湿地帯であった。 本地域の耕地は未整備のため、区画は不整形かつ狭小、道路も不完全な状態で、しか た平坦な水田地帯である。

5 8

3

写真

また一朝豪雨の際には、両河川の水位が上昇するため地区内の排水機能は低下し、し

ばしば湛水による被害を受けていた。 このような不利な地形的制約から農作業や導水路の維持管理に多くの労力を費やし

に、関係者一同千秋の思いをよせていた。 かかる生産条件を改善し、都市近郊の利点を生かした生産性の高い近代的農業の確立 ていた。この為に労働生産性は極めて低く、また地域農業の振興を阻害していた。

役職員・関係受益者のご尽力ならびに御協力に対して深甚の謝意を表すと共に、先駆 以来一五年間の歳月を経て平成六年度に完成したものである。 この間、農林省・九州農政局・熊本県・熊本市・益城町・土地改良区の顧問や歴代

とした県営圃場整備事業の計画を三度目の試みにして樹立し、昭和五五年度に着工。

分散した農地の集団化を行い併せて湛水被害の解消を図るため、排水対策を一体事業

このため、生産基盤である農地の区画整理・用排水路・道路などの総合的な整備と

者の偉業を称え、秋津飯野地区の豊かな農業の発展を記念し、ここに記念碑を建立す

平成六年一〇月吉日

秋津飯野土地改良区

事業名 県営秋津地区圃場整備事業

3 2 事業主体 事業費 熊本県農政部

施工期間 三・五五八・〇〇〇千円

昭和五五年度~平成六年度

施工面積 一八六hea

5

三三六戸

(語りべ学習会)

**芜 莱 校 区**